



週1回のスタッフミーティング。インドネシア人と日本人スタッフ全員が集まり、情報を共有する場となっている。スタッフの誰かが用意するお菓子を食べながら、和やかな雰囲気で行われる

## ココロとチカラを合わせて 「より良い明日」をつくる

JICAインドネシアのマカツサル・フィールドオフィスに勤務する山下契さん。「インドネシアのことはインドネシアの人が一番よく知っている」と、インドネシア人と日本人スタッフの協働体制づくりに取り組んでいる。

### 大

学では国際関係論を専攻したこともあって、世界平和に貢献する仕事をしたい、という漠然とした思いでJICAを受験しました。とはいっても、当時はパスポートすら持っていないなかったほど、私にとって海外は遠い存在でした。

JICAに就職し、半年間の新人研修先となったのがケニア。学生時代に駅伝をしていた私は、「世界的なランナーを多く輩出する国」という単純な理由で、研修を楽しみにしていました。

目の前に広がる高層ビルとスラム。ケニアで開発途上国の現実を初めて目の当たりにしたのです。すべてが衝撃的でした。「貧困とは非人間的な状況なんだ」と痛烈に感じ、国際協力を一生の仕事にしたいと強く思ったのです。

現在、私が勤務するマカツサル・フィールドオフィス(MFO)は、国際協力の最前線。東西地域間で開発格差が深刻なインドネシアで、貧しい東部地域を対象としたプロジェクトを担当するため、同地域に開設されたオフィスです。

私は、「南スラウエシ州地域開発プログラム」の中で実施されている保健教育、地場産業振興、都市計画などを担当してきました。何度も現場に足を運ぶ中で、どんなプロジェクトであれ、インドネシア側のカウンターパートや住民、そ



JICAインドネシア  
マカツサル・フィールドオフィス

### 山下 契

YAMASHITA Chiguru

大学卒業後、2004年JICAに就職。沖縄国際センター、人間開発部を経て、09年6月より現職。

して日本人専門家や業務を支えるプロジェクトチームのインドネシア人スタッフが一緒にあってつくるものであり、「日本人だけでも、インドネシア人だけでも、効果的なプロジェクトは行えない」ということを切に感じました。もちろんこれは、プロジェクトをサポートするMFO側の体制にも同じことが言えるのです。

そしてこの1月からは、MFOの事務所運営全般を担う総務業務も担当することになった。今、取り組んでいるのがインドネシア人と日本人の「協働体制」の強化です。語学はもちろん、現場関係者とのネットワーク、伝統や習慣、国民性を踏まえて業務を進めるノウハウなど、インドネシア人スタッフが持つ強みをこれまでに以上に生かしていきたい。そのためにも、インドネシア人スタッフが能力を十分に発揮できる環境を整え、日本人スタッフとペアでプロジェクトを担当する体制を強化していくことが重要だと考えたのです。

そこで立ち上げたのが、「ナショナル(インドネシア人)スタッフ向けセミナー」と、日本・インドネシア人スタッフ全員が参加する「定例スタッフミーティング」。セミナーでは、MFOだけでなく各プロジェクトのインドネシア人スタッフと一緒に、プレゼンテーション技術など

の実務的なスキルアップのほか、各プロジェクトの内容などを学ぶ機会を設けています。不定期ですが、5月までに7回実施しました。また3月から週一回開催し

ているミーティングでは、その週にあつたこと、さらに来週のスケジュールなどをスタッフ全員が発表し共有。特にインドネシア人スタッフが何か問題を抱えているときには、これまでの経験やJICA全体の方針などを踏まえてアドバイスしています。最近では、こうしたミーティングを通じて、「MFOファミリー」としての一体感が強まってきていると感じています。

プロジェクトやMFOのインドネシア人たちは、みんな「自分たちの国を良くしたい」という情熱と意欲を持っているのです。こうした人たちと、「ココロ」と「チカラ」を合わせて、「より良い明日」につながる協力に取り組んでいきたい。それが今の目標です。



山下さんが担当する地域保健運営能力向上プロジェクトで、村に建設された保健所。子どもが楽しめるように船形の乳幼児用体重計を設置するなど、工夫を凝らしたサービスが評価され、州のコンテストで最優秀賞を受賞した